

英文学科での学びと今

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-05-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金澤, 隆志 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/298

英文学科での学びと今

金 澤 隆 志

1982年3月に英文学科を卒業後、83年4月に女川高校に新規採用となり、泉松陵高、仙台南高、柴田高、本吉響高と18年間教壇に立った後、県高校教育課に指導主事として5年間勤務しました。その後、県第二工業高、志津川高、角田支援学校に7年間教頭として赴任し、2013年4月から仙台大志高校の校長を務めています。

思えば、文理予備校に通っていた際、東北学院大学の黒川七郎先生に英文読解を、情野鉄雄先生に英文法を教えていただいたのが、東北学院との出会いでした。夏期講習を通して、お二人の先生にお世話になることが多くなり、いろいろと指導をいただいているうちに、お二人が東北学院の先生方であることを知り、自然と導かれるように文学部英文学科に進学いたしました。

中学時代から英語の音が好きで、ラジオ講座などを聴きながら発音をまねしていたものです。高校に進学し、文法やら読解やらが難しくなり、授業について行くのがやっとの状態でした。英語は好きでしたが、決して得意というわけではなかったのです。特に読解が苦手で、どのように攻略していったらよいのか思案しているうちに、予備校に“進学”することとなりました。そこで出会ったのが、先に述べたお二人の先生でした。お二人の先生方の授業は私にとって目から鱗の授業でした。なんとなくわかったような気持ちにさせるのではなく、こうだからこうだと理詰めで解説なさる名講義に救われたのは私だけではなかったと思います。

大学進学後は、グループ主任が柴田良孝先生で、あの穏やかなお人柄に幾度も助けていただきました。3年で専門課程に進むにあたり、18世紀英文学を主として研究なさっている遠藤健一先生をご紹介いただきました。遠藤ゼミでは、ジョナサン・スウィフトの『ガリヴァー旅行記』第四編について勉強しました。ここで、スウィフトは風刺を駆使し、極端な理性と獣性の象徴であるフウィヌムとヤファーを示すことにより、クリスチャン・オーソドクシーとしての中庸の精神を大切にしなければならないと訴えかけているのではないかと考察しました。遠藤先生には、表面に現れたものだけではなく、その奥に秘められている真実を見極める力を身に付けなさいと教えていただいたように思います。お二人の先生には公私にわたり大変お世話になりました。当時のエピソードを述べますと枚挙にいとまがありません。よく一緒にキャッチボールをして遊んでいたいたり、お茶をごち

そうになったりしました。東北学院の先生方は本当に面倒見のよい先生方なのだと、学生としてありがたく感じておりました。

さて、私は、生来の歴史好きで、史学科の皆さんに混じって考古学や古文書学、博物館学などの勉強をさせていただきました。そこで、史学科のある先生から仙台藩の特徴についてご講義をいただきました。それは、仙台藩と他の東北諸藩の人材育成の違いについての講義でした。要するに、仙台藩以外の諸藩は自然環境が特に厳しく、リーダーとなる優秀な人材を育成しなければ藩が立ちゆかないが、仙台藩は諸藩に比べて豊かであり、豊かさゆえの足の引っ張り合いやリーダー育成への切迫感が他藩と比べて希薄であり、関東以南では仙台人の通った後にはぺんぺん草も生えないと言われていたとの内容でした。学生が分かりやすいように極端なお話をなされたのだと思いますが、仙台を誇りに思っていた私にとって、この講義内容は大変ショッキングなものでした。つまり、仙台藩が風土としてそのような体質を持っていたのならば、宮城県は自ずとその体質を世襲していると思ったからです。もし、そうなのであれば、そのような負の再生産を食い止め、できるだけ人を育てるのが上手な県にしたいと思うようになり、それが私の教師を目指す目標となりました。現在も同じ思いを持ち続けています。教員として設定した目標がこのような内容ですので、ゴールがありません。私が、いつも新鮮な思いを持ち、研鑽し続けてこれたのは、この目標設定にあったのかもしれないと、今思い起こしているところです。

社会人として、自分の目標をどこに置くのかということは、大きな選択です。あまり目先のことにとらわれ過ぎますと、若くして成長が止まります。例えば、“教員になること”自体を目標にした場合、教員採用試験に合格した時点で目標達成となり、後は公務員としての権利を最大限に利用して“楽にいかうか”などということになりかねません。もちろん、このような方は、職場において歓迎されないだけでなく、年齢に見合った成長を遂げることができませんので、年を重ねるごとに誰にも相手にされなくなります。

学生である若い世代の皆さんには、目先の利害にとらわれず、より遠くを見つめて、大きな目標を持っていただきたいと思います。より高い目標を見据え、一粒の地の塩として、強い信念を持ち、人との関係を大切にして歩んでいてもらいたいと期待しています。

ここで、一言、学生の皆さんに英語教員として求められる資質についてお話しておきたいと思います。

先ず第一に、一定以上の英語力です。指導者として最低必要な英語力として、

文部科学省では、英検準一級、TOEFL (iBT) 80点、TOEIC 730点程度以上と明確に示しています。教員採用試験では、この程度の力がないと一次試験に合格できないと考えていいと思います。従って、採用試験を受ける前に、これらの検定試験をクリアできるだけの実力を付けておく必要があります。

一次試験に合格すると、宮城県の場合、2次試験では、英語による面接試験があります。リーディング力、自分の考えをまとめて発表する力、会話力等が試されます。これらの面接試験を通して、実用英語力だけではなく、その受検者の人柄や将来の可能性まで判断して合否が判定されるのです。英語教員として何をを目指したいのか、あらかじめ自分なりの考えを持っていないとしどろもどろになってしまいます。元気はつらつと、皆さんの教職への思いを面接試験で示してください。

実用英語力があるからといって、教壇に立った時の指導力が優れているとは限りません。英語教師として、分かりやすく、魅力的な授業を提供し続けるためには、たゆまぬ研究と修養が必要です。私の場合は、原則として年に4回以上研究授業を実施しました。英語科の先生方ばかりでなく、他教科の先生方、あるいは中学校の先生方に授業を見ていただき、改善点について貴重なご意見を頂戴し、授業改善に生かしてきました。指導力の向上を図るため、公開授業や研究授業は、最も身近な手段として見直されるべきだと考えています。

そして何より大切なことは、いつまでも人として成長し続けようとする努力だと思います。教員採用試験合格後に肩の荷を下ろした人と、いつまでも成長しようと研鑽し続ける人とは、年月とともに指導力に大きな開きが生じるのは当然のことです。社会は、どこの大学を出たかで通用するほど甘くはありません。大学を出た後で、いかに努力して社会に必要とされる人材に成長していくかが問われるのです。

教員というのは、人を扱う職業です。扱う生徒の将来を思いながら、今を指導していく仕事です。計画した以上にうまくいくこともありますし、逆に裏目に出ることもあります。しかし、たゆまず努力し、思いやりの心を持って接すれば、必ずその思いは生徒に通じます。どんな生徒も人を見抜く力を持っていますので、常に“本物”でいないと生徒には相手にされません。生徒とともに成長できる教師になることができるかどうかは、自分の生きる姿勢にかかっているのです。

では、教育の現場でお待ちしております。